

DHARMA EYE



法眼

ご挨拶

総監 フォルザーニ慈相

ヨーロッパ国際布教総監部

私は、2009年11月1日より、パリに事務所がある曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監部の新しい総監に就任いたしました。何よりもまず、前任者である今村源宗老師が5年間に渡って、総監として果たされました目覚ましい仕事に対して感謝の意を表したいと思えます。今村老師とその職員の方々の懸命な働きのおかげで、曹洞宗宗務庁と私たちの関係に長い間影響を及ぼしていた制度上、組織上の問題の多くが解決されました。今村老師の自分の総監としての役割は共通の利益のために役に立つことであって、自分の見解を押し付けようとするのではないという認識であり、それは私にとってこのうえなく価値のある人間的・宗教的教訓です。

私は、総監として以下のような方針で取り組んでいく所存です。まず、総監の職務は、私個人の宗教的な修行、あるいはそれと重複した職務ではなく、また曹洞宗の階級制度の経歴としての最終段階、またその過程でもありません。それは私が仏弟子として、これらの状況下において取るべき立場であるからです。私が新しい職務を順調に遂行していくためには、人々が日々の生活を現実的におこなっているように、単に仏法に従い、それを学び、それを明らかにしていかなければならないと確信しています。

今や確固とした世界的な文化にまでなった西洋文明の全体において、その感化の源であったヨーロッパ文明は、甚大な宗教的、文化的、社会的な結果を伴うアイデンティティ・クライシス（自己認識の危機）、また個人や地域社会に影響を与え、長期にわたって悲惨な結果をもたらすかもしれない危機的状況にあります。このような背景において、ヨーロ

ッパ、そして全世界における仏教の重要性とはいかなるものであるのか？仏教は何をおこなうべきなのか？という問いを、もう一度、真剣に自問してみるとということが絶対に必要です。今日のヨーロッパにおいて、どのような仏教が、誰にとって、なぜ望ましいのかを問わなければなりません。言い換えれば、どの仏教がヨーロッパの実社会において適切なのでしょうか？

私たちの場合、この質問に対する答えは間違いなく次のようにならざるを得ません。それは、曹洞宗の法灯は、道元禪師、瑩山禪師の祖師方によって、お釈迦様の教えを正しく伝え、相続し、さらにそれを受用している仏教であるからです。しかし、この答えは自分の属している宗教を単に表明する固定的な決まり文句であってはなりませんし、自分自身を仏教者として認識してもらうための単なる儀式的な表明であってもいけません。制度上の規則は、方針を探し求め続けている私たちを助長するために役立ち、結果や過程のためではなく、目的を達成するための一つの手段であることが重要です。

もし私たちが道元禪師を模範として従うとすれば、今日のヨーロッパにおいて、また私たち一人一人の人生において、お釈迦様の教えに何の意義があるのでしょうか？もしこの質問を問い続けるならば、私たちを日々の活動を持続させ、今日のヨーロッパにおいて仏教が取らなければならない、また将来において取るであろう新しい形態を生み出すものとなります。私たちは、本質的にこれこそが正しいと思わせる誘惑（非常に魅惑的な誘惑）に従わないようにしなければなりません。

私たちの伝統における正しい相続とは、正しい形態のものではありません。もしそういうものがあるとしたら、その正しい形態とは、正しい相続であり、日々の坐禅であり、それらは際限のない、そして法門へと導く無数の道のすべてを学ぶという誓願の変わることはないものです。

交代の時期というのは、新たに始める時期でもあります。私たちの先人たちが切り開いた道をさらに前進させる時であり、また同時にあらたなる再生の機会でもあります。特に、日本人ではない宗侶を総監に抜擢するという事は、その職に就く機会を与えられたものにとっただけでなく、誰にとっても実に目新しいことであります。なぜなら、それは日本の組織がヨーロッパの現実、そして国際的な現状への解放を示すという歴史的な兆候だからです。この目新しさが意味することの一つは、総監とヨーロッパ国際布教総監部管内の僧侶や関係のある人たちの間に、これまでとは異なる形式のコミュニケーションが生まれる可能性があるということです。それは、言語の壁を一部乗り越え、異なった解釈を生み出しかねないフィルターを取り除くことができ、また双方に共通の文化的背景があるからです。

私の果たすべき任務は、主に、一方では曹洞禅の伝統に培われてきた教えを受け容れつつ、他方では人生を仏道に捧げた人々からの要求に耳を傾けることだと考えております。私の介在を希望するすべての人のために尽力します。また、曹洞宗とヨーロッパ国際布教総監部によって規定され、承認された規則に従って、私の助けを求め人々と協力し援助をしていきます。さらに、ヨーロッパの文化的、精神的、宗教的な現実に向き合い、交流し、対話していく道を探りたいと思っております。

現実には複雑で、様々に交錯し、矛盾に満ちています。そこには強く自明な統一力がある一方で、その多様性は危険な豊かさでもあります。ヨーロッパの仏教は、ヨーロッパの腐植土の中に植わった、東を向いた「盆栽」であることはできません。また、オリエントの仏教(私たちの場合は日本的仏教)のヨーロッパ化であることもできません。ヨーロッパの仏教の歴史は、人間の一生に比べるならば長いように思えるかもしれませんが、実は非常に短いものであって、仏教全体の観点から見ると、実際は始まったばかりだと言えるかもしれません。結果を早急に望むのではなく、また、そこに存在する相違を消し去って、単一の型に無理やり押し込もうとする魅惑的な誘惑に屈することなく(これは繰り返し強調する価値があることです)、ヨーロッパの仏教の形態を見出していかなければなりません。

今日の世界においては、多くの人々が安全な壁の内側に自分を引きこもらせ、多様性の海の中で自らを失うかもしれないという恐怖を追い払おうとしていることは明らかです。いつも中道を歩むために、二つの極端なことは避けなければなりません。いかなる形態も、終わりのない変化を遂げる一時的な要素であり、ある特定の形態がすでに出来上がっており、それを模倣すべき完全なモデルであるとするとしてもはいけません。また、正しい形態をいつまでも探し求め、実践することが救済という理想の唯一可能な実現の仕方であることを忘れて、すべての形態が皆同じであるとするとしてもはいけません。

私が望むことは、ヨーロッパにおける曹洞禅が自由で開放的な存在であり続けていくということなのです。



南アメリカ国際布教総監部 両大本山南米別院佛心寺 創立50周年記念慶讃法会

総監 采川道昭 南アメリカ国際布教総監部

2009年11月13日より15日まで、南アメリカ国際布教総監部、両大本山南米別院佛心寺創立50周年慶讃法会が厳修されました。

50周年記念事業として坐禅堂、開山堂、その他の施設を具えた伽藍整備を発願いたしました。これらは歴代国際布教総監の心願でもあり、當寺檀信徒の希望でもありましたが、未だ果たされぬ夢でありました。そしてこのたび、両大本山、曹洞宗宗務庁を始め、日本全国津々浦々の御寺院様方にご法縁を頂戴いたしましたことと、一般の方々の深いご理解ご支援ご法愛を頂戴いたし、当初の目的を果たすことができましたことを、衷心より感謝申し上げ甚深に御礼申し上げます。

思い返すとブラジルの地に本格的に曹洞宗が広まったのはブラジルに移民していた信者よりの正式な開教を願う要望書が提出されたことにより、曹洞宗管長高階龍仙禪師が渡伯の意を持たれ、1955年にブラジル各地を御巡錫されたことに始まります。その際御歳80歳という御老体をいとわれず各地に法筵をお開きになり、御巡錫されているお姿に、ブラジルの信者の方々は大変感激したそうです。御巡錫の際モジ・ダス・クルーゼス市にブラジルでの初の曹洞宗寺院禅源寺が創立されました。

1956年南米に初代布教総監の新宮良範老師が赴任され、禅源寺に総監部が置かれておりましたが、1959年トーマス・デ・リマに別院、総監部を設置いたしました。1965年には現在の地に別院、布教総監部が移転されました。この間、1960年にはローランジャに佛心寺が落慶致しました。1974年にはイピラス佛心寺が落慶したほか、ブラジル各地に禅道場が設立されていきました。その間、新宮老師は南米別院佛心寺並びに総監部が老朽化してきていたので、この機に坐禅堂を含めた本堂を建築しよう

と計画しておられましたが、1986年に遷化されました。ブラジルに赴任してから30年間に渡って、ブラジル各地に禅道場を創立し曹洞禅の南米での布教に大いに御尽力されました。

2代目の布教総監青木俊孝老師は1986年に赴任され、別院、総監部の再建計画を引き継ぎ布教教化に励みましたが、諸般の事情により1989年に帰国されました。

3代目の開教総監森山大行老師は1992年に赴任されました。森山総監赴任中の1995年に初代総監以来の念願の1つであった本堂が完成。開教40周年法要と併せて落慶法要が厳修されました。この後、森山総監は帰国されました。

1989年から1992年の4年間と1995年から2000年の5年間総監不在の年がありましたが、その間、開教師、現地の僧侶や檀信徒の御法援によりお寺は護持されておりました。

4代目の布教総監三好晃一老師は2000年に赴任され坐禅堂の建築計画を実行に移そうとしておりましたが、解決しなければならない問題があり、その問題が解決された後の2005年に帰国されました。

5代目の開教総監を拝命いたしました私は2005年に赴任いたしました。赴任して間もなく新宮老師以来の念願であった坐禅堂を備えた新館の建築を理事会より依頼されました。

お陰様で両大本山、曹洞宗宗務庁、日本全国の御寺院様方、御開山高階禪師法類一同様、一般檀信徒の皆様方の御法愛を頂戴し、2008年には地鎮祭定礎式を宮下陽祐教化部長老師導師のもと無事修行することができ、そして2009年の50周年慶讃法会には管長御代理として瀧英徳宗務総長導師のもと50周年慶讃法要を厳修することができました。併せて新館「大鑑閣」の落慶も無事に修行することができました。

大鑑閣は地下が駐車場、その奥に開山塔、歴住塔、亡僧

塔を建立し、1階が多目的ホール、2階には開山堂、坐禅堂、位牌堂、茶室（日本文化研修室）、3階には宿泊施設が具えられています。大鑑閣と本堂の間の中庭には永代供養塔を建立し、佛心寺入口には無縁供養塔も建立いたしました。また1階には納骨堂も建設を予定しております。またこの式典に先立ち兩大本山の猊下、宗務総長老師より諸額のご揮毫を賜りました。

法要では、13日には大鑑閣の落慶、額除幕式、開山像点眼法要、転読大般若祈祷法要、落慶祝賀会を行い、14日には開山塔の点眼法要、開山歴住諷経、達磨大師並びに大権修理菩薩点眼法要、万灯供養を行いました。15日最終日は、式の初めに雷雨となったものの法要に影響もなく南米開教物故者諷経、50周年慶讃法要、檀信徒総回向を行い最後は大鑑閣ホールにて記念写真を撮影し、50周年祝宴をもって3日間に及ぶ記念式典は無事円成いたしました。

この3日間で日本からの約100名を含め、ブラジル国内を始め諸外国からの法縁のご寺院様方、檀信徒の皆様等のべ500名の参列者が出席されました。

南米に曹洞宗の御教えが伝播されて以来106年が経過しました。ブラジルでは1908年以来、日本人移住者が新天地に夢を求めて移民しました。その向かった先では多くの苦難があり、艱難辛苦をしのぎながら生活をされました。その方々のおかげもあり寺院と曹洞宗の御教えも護持されてまいりました。そして今まさに大鑑閣の落慶に伴い、檀信徒や禅を志す南米各地よりの参禅者がこの大鑑閣で研修され、南米全土に正伝の仏法を敷衍してゆく中心となるよう、佛心寺檀信徒一同とともにさらに精進致してまいりたいと存じます。

合掌



「大鑑閣」額除幕式



万灯供養



50周年慶讃法要

「今、ここ」をどう生きる

中野天心特派布教師
長野県・常輪寺住職

2009年10月22日

アメリカ合衆国テキサス州ヒューストン禅センター

皆さま、こんばんは。

皆さまにこうしてお会いできましたこと、また話を聞いて頂けますこと、まずもって感謝を申し上げます。

初めに、確認させて頂きたいことがあります。

それは、「仏教の教えは単なる知識ではない」ということです。実践することこそが第一の眼目であります。今から約2,500年前、お釈迦様がご修行の末に気づかれた内容を「正法」、あるいは「仏法」と申します。「正法」とは「真実の道理」真理そのものをさします。その真実の道理を踏まえて、どのように実践していけば良いのかを示した教えが「仏教」であります。その教えを私たちが学び、そして実践していくことを「仏道」と申します。その実践する「仏道」こそが、私どもに課せられた第一の命題でございます。

今日、皆さまに話させて頂くにあたり、私は、「『今、ここ』をどう生きる」このようなタイトルを付けさせて頂きました。

そこで、皆さまに一つお考え頂きたいのですが、私どもの「生きる目的」とは何でございましょうか？ いかがでしょうか？

(聴衆：幸せに生きること)

そうですね。私ども人間のみならず、動物も、私は取って植物もと申し上げるのですが、この命あるものの生きる目的というのは、「幸せの確立」これ以外にないと思います。「より快適に」「より心地よく」というのは、動物であれ、植物であれ、命あるものの共通の本能です。

ところが、その「幸せ」がどこにあるのかということを探し、そして考えて求めるのは、数ある生物の中で人間だけです。そして、「幸せを何に感じるか」ということは、私たち一人一人が自分自身の内面に何を蓄え、何を大切に生きてきたかによって異なります。同時に、みんな幸せになりたいと思って努力しているのに、気がついてみればその幸せを常に感じながら生きている人は決して多くありません。

私が住職をさせて頂いているお寺には、色々な悩みを持って相談に来られる方が後を絶ちません。その悩みの内容を聞いてみますと様々でございます。「夫婦関係がおかしくなった」あるいは「親子関係が上手くいかない」「仕事はどうしても思うようにいかない」このように色々な悩みがありますけれども、皆さま異口同音に、「一生懸命頑張っている」ということを強調されます。私たちが、目的を立て、そして目的を達成するためには、確かに努力する、頑張るということは大切なことに相異ありません。しかしながら、その努力する内容、つまり何に向かって努力をするのかということをよくよく考えて努力いたしませんと、努力したためにむしろ不幸になったということが多々ございます。

仏教を説かれたお釈迦様、そして曹洞宗の教えを中国から日本にお伝えくださいました道元禅師様、共にお亡くなりなる直前に、最期の教えを遺しておられます。その中でお二人共に、人々が真の幸せを確立するためには、どうしても「精進」が必要であるとお示し下さいました。道元禅師様は私どもに、その「精進」ということを非常に懇切にお示し下さっております。日本では、「精進努力」と一つの熟語のように表現し、「精進」と「努力」が同じ意味であるような使い方が一般にされております。

皆さま、いかがですか？「精進と努力とでは、ここところが違うんだ」というふうに区別なさり、そしてそのどちらかに心掛けているという方はいらっしゃるでしょうか？

道元禅師様はこの「精進」を定義なさって、「道理にかなった正しいことに向かって絶えず勤めるのが精進である」とお示しになりました。言葉を変えれば、「正しい方向に向かって絶えず努力するのが精進である」ということです。ですから、方向が正しくなければ、いくら頑張ってみても、

それは精進ではないということですね。方向が間違っていて、努力する方向を誤れば、努力すればするほど、その目的、つまり幸せから遠ざかることになります。

例えば、海の上で船に乗って釣り糸を垂れ、釣りに興じていたとします。突然嵐に襲われ海に投げ出されました。何とか命だけは助かりたいと思い、陸に向かって懸命に泳ぎます。本人は陸に向かって泳いでいるつもりが、もし海に投げ出された時に方向感覚を見失い、沖に向かって泳いでいたとするならば、残念ながら懸命に泳げば泳ぐほど、死に向かって泳ぐことになります。

方向が違っていれば、目的から遠ざかるということは、物理的な事実であります。正しい方向に向かって、コツコツと絶えず努力していく、それが「精進」だということです。

ところが、ここまでお話し致しますと、おそらく皆さまの心の中に、それならば「正しい方向とは何なのか？」という疑問が生じてくると思います。初めから、間違った方向であるとわかれば、その方向に向かって努力する人はいないわけでございます。結果を見て、努力の方向が誤っていたことに気づくわけですから。

お釈迦様は今からおよそ2,500年前、小さいながらも釈迦国という部族国家の王子としてお生まれになりました。ところが、生後7日目、そのお母さんが亡くなってしまいます。そして、その妹である叔母さんに育てられるんですね。幼い時に、お母さんを失うという無常に出会われたせいか、お釈迦さまは幼い頃より、人間の生き死にの問題、生きることの意味などを深く追求しながら成長されます。すると、そういうわが子の様子を見た父親である浄飯王(じょうぼんのう)は、お釈迦様の将来を心配しまして、努めて楽しい条件を与えます。玩具や美味しいもの、楽しい環境をどんどん整えてやるわけであります。ややもすると、私たちが幸せになるための条件として求めて止まないのが、玩具や身に着けるもの等であります。そういった物だけではお釈迦様の幸せを確立することは出来ませんでした。

お釈迦様は、そうした物質的なもの、身に着けるもの等を一切放棄し、29歳の時に出家をされ修行の旅に出ます。

当時のインドにはたくさんの宗教がありました。それらの宗教の多くに共通することは、修行の内容が難行苦行をすることでありました。「私たちが悟りをひらくことができない原因は、煩惱や妄想があるからだ。その煩惱や妄想が働くのは、私たちの肉体が元気だからだ。その肉体を極限まで消耗させ、痛めつけば、煩惱や妄想が働かないようになる」と考えたのです。それが難行苦行の目的であります。

お釈迦様も、6年間にわたっていろいろな宗教の指導者を訪ね、教えを乞い、難行や苦行を重ねられますが、難行や苦行だけでは真実の道理に目覚めることができないと知り、最後は坐禅の修行をされます。菩提樹の下で7日7晩にわたって坐禅の修行をされました。自分の自我を振り回すことを一切やめて、姿勢を調べ、呼吸を調べ、心を調えることを実践されました。そして、8日目の朝、東の空に明けの明星が輝くのをご覧になった時に、それまでの心の中の疑問が、霧が晴れるようにすっかり晴れます。それが「悟り」であります。そのお悟りをひらかれた時に、お釈迦様は、「素晴らしいことだ。素晴らしいことだ。真実、真理に目覚めてみれば、何のことはない、この世の生きとし生けるものは、最初からみな尊い命のお働きに生かされていた。仏のお命そのものだった」といった内容の喜びの声を発せられたといひます。

「尊い命のお働き」とか、「仏のお命」といった抽象的な言い方をしますとわかりにくいと思いますので、例を上げてお話しを致します。

例えば、私たちが夜ベッドの中で眠りにつく。その時には自分で生きようとする努力を一切忘れ、安心して眠りに入ります。そうした中で、1分たりとも、一刻たりとも休むことなく、この命の働きは私たちの命を生かし続けようと働き続けてくれています。心臓が動き、身体の隅々まで血液を行き渡らせ、あるいは栄養を運んでくれる。私たちが支えてくださっているこの尊い命のお働き、これを「尊い命のお働き」とか、あるいはまた、「仏のお命」という言い方をしているのです。

私たちが、仮に絶望に喘いで自殺まで考えたとしても、常に命のお働きそのものは私たちに裏切ることなく、「1

分でも1秒でも頑張っ生きてほしい」と願いつつ、私たちが生かし続けてくれております。

今から10年前、1999年10月5日、悪性リンパ腫のために享年40歳で生涯を終えた方に中島みどりさんがおられます。彼女には小学校2年生の長女・夏美ちゃんと幼稚園の園児・洋生（ひろき）君、2人の幼い子どもさんがいました。

自らの病名も病状も熟知していた彼女は、まだ幼い2人の子どもたちを遺して亡くなっていかねばならないことを知り、心の底から申し訳ないと考えます。そして、子どもたちにどんなことがあっても幸せになって欲しいという思いから、子どもたちへの願いや祈りを文字にしたためました。それが一冊の本になっております。

その中で、子どもたちに託す最大の願いを、「いつでも、どんな時でも、『私が 私であってよかったといえる あなたになれ』と呼びかけて下さる方があった。その呼び声を聞くことが人間として一番大切な願いではないでしょうか」という言葉で示しております。

この中島みどりさんは、幼い頃から、近所のお寺の日曜学校に通っておられました。従いまして、幼い頃より仏教の教えに親しみ、仏教的な素養を十分に身につけておられました。

彼女が、「いつでも、どんな時でも、私が私であってよかったといえるあなたになれ」と呼びかけて下さる方と呼んでいるのは、たとえ私たちが失敗や絶望の中で自らの生命を投げ出そうとしている時も、一時も見捨てることなく私たちの生命を生かし続けてくれるこの命のお働きそのもののことです。生きる努力をいっさい忘れ安心して眠っている時も、一瞬たりとも休むことなく心臓を動かし、呼吸し、体の隅々に栄養を行き渡らせてくれる尊い命のお働きのことです。

その尊い命のお働きに気づいた時、「いついかなる時も、自分は自分でよかったんだ」という確信が持てるようになるのです。また、そう確信できるような生き方を常に心掛けて

欲しいという、母の二人の子どもへ対する深い願いです。

お釈迦様は、私たちのこの尊い命、一人一人がかけがえない命を頂いてきたんだということに気づかれ、そしてそのことを声高らかに述べられました。生まれた環境や条件は、それぞれ一人一人みんな違います。しかしながら、どの命一つをとってみても、軽んじていい命は一つもない。その一人一人が自分にしか果たし得ない尊い役割を担っています。絶対の命をここに頂いているんだ、というのがお悟りをひらかれた時の内容であります。そして、その尊い命が一つとして他と無関係な命はない。みんながそれぞれに他を支え、同時に他のあらゆるものに支えられながら生きております。これを「縁起」という言葉で、お釈迦様はお示しになりました。そして、そういう尊い命をどのように使っていけば良いのかということ、ご信者の方々の心のそれぞれの悩みに応じてお説きになった、それがお釈迦様45年間のご説法でございます。

お釈迦様はその尊い命の使い方を、このようにお示しになりました。

「過去を追うことなかれ。未来を願うことなかれ。過去は過ぎ去ったものである。未来は未だ到っていない。現在の状況をそれぞれによく観察し明かに見よ。今なすべきことを努力してなせ」

ここで確認しておかなければならないことは、やりたいことをするというものではございません。「なすべきことをなせ」、ということであります。道元禅師様はこのことを「一行に遇うて、一行を修す」とお示しになりました。「自分が『今、ここ』でご縁を頂いたこと、そのことに全身全霊、真心をこめて行じていく」と、そのようにお示し下さいました。

そのことをもう少し分かり易い言葉でお示し下さったのが瑩山禅師様であります。瑩山禅師様は、お師匠様である徹通義介禅師様から、「平常心」ということについて尋ねられました。「平常心」とは、禅の教え中で非常に大切にされる心でございます。

皆さまは、「平常心」をどのようにお考えでございますでしょうか？

日本では、この「平常心」という言葉が日常会話の中でも時々使われますが、何事が生じてもその事に心を感わされることなく、どっしりと構えて生きていく。そういう心を、現代の日本人は「平常心」というふうに捉えています。つまりは、岩のようにどっしりとした、微動だにしない、そういう心を「平常心」と捉えているんですね。皆さまはいかがでございますか？

瑩山禅師様はその徹通義介禅師様の問いに対して、「茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫す」とお答えになりました。「お茶が出されたら、ひたすらお茶を頂く、ご飯が出されたら、ただひたすらご飯を頂く」それが「平常心」だということですね。

瑩山禅師の示された、「お茶を出して頂いたらお茶を頂き、ご飯を勧められたらご飯を頂く」ことは、だれもがやっていると思われるかもしれませんが、しかし、私たちがやっているのは、お茶が出されればお茶を飲むことに貪り、ご飯を出して頂けばご飯を食べることに貪っている場合が多いのではないのでしょうか。

そして、ややもすれば「熱い」と言っでは文句を言い、「固い」と言っでは不平を言っているのが私たちの日常の生き方です。そうではなく、勧めて下さった方や、お料理をして下さった方々に深く感謝し、ありがたく頂戴するのです。

そして、どのような食事を出されても、ありがたくいただくかなければならないのだから、どんなふうに作ってもいいということではございません。お茶を勧める側、お食事を調理する側にも「平常心」はあります。ひとたび勧める側に回ったならば、召し上がって下さる方の立場に立って、真心をこめてお茶を点て、真心をこめて食事を作らせて頂く。何事であれ、「今、ここ」でご縁を頂いたことに真心をこめるといことです。

私は、先程、典座様始め、参禅者の方々が調理して下さ

った心のこもった食事を頂戴しまして、心から感銘致しました。

食事を作る側にまわったならば、その食事を食べてくださる方の立場になって、真心をこめて食事を作らせて頂く。身体の都合によって塩分を控えなければならない方に食事を作るのであるならば、塩分を少しを控えめにする。年配の歯の悪い方に食事を作るのであれば、食べやすいように食材をなるべく薄く刻んだり、柔らかく調理させて頂く。作る側にも、頂く側にも、それぞれの「平常心」がございます。大切なことは、自分が「今、ここ」でご縁を頂いた、その一つ一つのことに真心をこめて行なっていく、それが「平常心」だということですね。

私が学生時代から大きな影響を受け、心から尊敬申し上げる老師がおられました。もう既に、14年前にご逝去されました。そのお徳の高さ、ご境涯の深さゆえに、常に多勢の若者が教えを求めて集まり、晩年の5年間には延べ600人からの修行僧や学生が老師の下で修行しました。ある時、一人の大学院生がその老師にお茶を点てながら申し上げました。「老師さまの回りにはいつも多勢の人がおり、中々お尋ねすることができなかつたのですが、今日はこうして老師さまと二人きりになることができ、お茶を点てさせて頂いております。一つお尋ねしてもよろしいでしょうか」と。

老師は「何だね」とお答えになります。青年は、「老師さまはいつも、『今せんらんこと（今しなければならぬこと）を今する。それが真の修行だ』とおっしゃいますが、『今せんらんこと』というのがよくわかりません。私は大学院の学生です。その私が『今せんらんこと』というのは学問かと思いますが、そういう理解で宜しいのでしょうか」とお尋ねしました。

皆さん、如何ですか？

老師が「その通りだ」とお答えになったと思う方、手を挙げてみて下さい。（挙手を求める）

「そんなことではだめだ」と言われたと思う方、手を挙げて下さい。（挙手を求める）

老師は、即座に、「何をバカなことを言っているんだ？お前は今、何をやっているんだ。お茶を入れているんだろ。そのお茶を入れることを真心こめてやらないで、ほかに今やるべき事があるのか」とどなられました。「今せんならんこと」というのは、今の一瞬、「今、ここ」のことをいうのです。

今から2年程前、2007年2月23日のことあります。鎌形紀子（かまがたのりこ）さんがスーパーの駐車場で殺害されているのが発見されました。事件後、しばらくの間、夫である敏（さとし）さんが犯人ではないかと疑われました。敏さんは小さな会社を経営しておりましたが、愛する妻を失い、なおかつ、犯人扱いをされ、会社の客も少なくなり、生きていく希望を失いかけてます。そんな折、警察から奥さんの遺品が戻ってきました。遺品の中に、赤い表紙の皮手帳がありました。裏表紙を開いてみますと、そこに紀子さんが自筆で記した言葉が書かれていました。「真心を尽くした事は／他人(ひと)は知らなくても／自分を支える力になっている」と。

敏さんは、奥さんが大切にしていたこの言葉に出会い、いつもそういう生き方をしていたことを思い出します。そして、自らの現在の生き方を深く反省し、生きる希望を取り戻して今は元気に生きておられることが、今年の春、日本のテレビの朝のニュースで紹介されました。

まさに、「今、この事」に真心を尽くすことこそが、自分自身の生き方に対する揺るぎない納得と自信につながっていくのです。そして、「今、ここ」でご縁を頂いたことに真心を尽くすことが、この尊い命を生かし切ることになり、真の幸せを確立することになるのです。

先程、私は、「正しい方向に向かって努力すると言っても、その正しい方向を見極めることが難しい」と申し上げました。私たちの日常生活の中で一つ一つのことについて、「これが正しい方向なのか、正しい方向でないのか」ということを、常に詮索するということは非常に大変なことでございます。そうではなく、一瞬一瞬「今、ここ」に真心をこめて行じていく生き方を心掛けていけば、自ずと私たちの努力がそのまま精進に繋がっていくのです。

お釈迦様は、「ご縁」を非常に大切にされました。私たちの日常は直接的な原因と、間接的な原因である縁によってなりたっております。原因が一つであっても、そこにどういふご縁を与えるかによって結果は様々に変化してまいります。例えば道を歩いていて、一本の棒が落ちていたとしましょう。その棒を拾って、地面に字を書けばこれは筆記用具になります。しかし、その棒を使って、学校の先生が黒板の文字を指し示せば、今度は指揮棒になります。あるいは、その棒を使って相手を殴ったりすれば、これは武器であります。寒い日などにその棒を折って、火を焚けば薪であります。原因である棒は一つであっても、その棒にどういふご縁を与えるかによって、その結果は様々変わってまいります。

私たちが今ここにある命は紛れもなく一つであります。しかしながら、私たち自身がどういふご縁に出会うかによって結果が様々に変化してまいります。ですから、目標をどこに定めて、どういふご縁に出会うかが非常に大切な点であります。

ところが道元禪師様は、どういふご縁に出会うかということ大切なことに相異なるけれども、それ以上に大切なことは、「今、ここ」で出会ったご縁を自分でどう生かしていくか、そのことが更に大切であることをお示しになっておられます。道元禪師様は、修行の根幹に坐禅をお定めになりました。しかしながら、日常のすべてを坐禅だけで過ごすということは、不可能なことです。そこで道元禪師様は、私たちの日常の生活の中に坐禅の心を活かしていく生き方をお示しになりました。顔を洗うこと、あるいは歯を磨くこと、あるいはお手洗いをすること、日常生活すべてにわたって、細かく懇切丁寧にその勤め方をお示し下さいました。私たちの日常生活の一つ一つのことを、真心をこめて懇切丁寧に行じていく。実はそこにこそ、禪の生き方が実践されるということでもあります。

お釈迦さまは、「まことの智慧」を養うことの大切さを説かれました。智慧というのは単なる知識、もの知りではございません。禪の教えでは、この智慧を時に「大圓鏡智」という言葉で表現します。「丸い大きな鏡のような智慧」ということです。

よく磨かれた鏡は、自分の目の前に来たものを細かな部分までありのままに映します。次に鏡の方向を変えると、前に映していたものは完全に消し去り正面に来たものをまたありのままに映します。もし前に映していたものを完全に消し去らずに次の物を映したら、そこに二重映し、三重映しが生じ、映したものを正確に認識できなくなります。これが「まことの智慧」を説明した智慧の特徴であります。

ところが私たち人間は、中々この鏡のようには参りません。喜びであれ、悲しみであれ、また心配事であれ、私たちは前の感情や記憶を引きずって次の事柄に遭遇するため、冷静に、そして正確に対処できない場合が多いのです。一瞬、一瞬、「今、ここ」のことは「今、ここ」で完結させ、そして次に立ち向かう生き方、これこそが「大圓鏡智」に裏づけされた生き方であり、「一行に遇うて一行を修す」生き方、禅に生きる生き方なのです。

ですから、禅の理想とする生き方は、人生における「今、ここ的一步」を目的とする生き方です。目的を向こう側に置き、その目的に到達することだけに価値をおきますと、目的に到達できなかった場合には、それまでの歩みがみな無駄なものに思えてしまいます。しかし、一步一步を目的とし、その一步の歩みの中で回りの景色や事柄に心遊ばせることができたなら、一瞬一瞬「今、ここ」のことで問題は解決しているのです。

山の頂上を極める事だけを目的に致しますと、目的にいたる途中の一步一步は苦痛にしかありません。そして、もし頂上に到達することができなかつたりいたしますと、途中の苦勞が全部無意味なものに思えてきます。しかし、一步一步が目的になりますと、歩きながら目に映るもの、耳に聞こえるもの、かぐわしい花の香りなど、一つ一つの事に喜びを感じることが出来ます。そして、結果として頂上に到達できればそれもよし。到達できなくとも、心は十分に満たされることになります。

日常生活の中で、「今、ここ」で頂くご縁の一つ一つの中に、例えば言葉使いや人に対しての振る舞い、それら一つ一つに真心をこめて行じていくということ、それが日常生活の全般にわたって禅の生き方を貫いていく生き方なのです。

今晚はみなさまに、「『今、ここ』をどう生きる」と題して話しをさせて頂きました。

ご静聴、まことにありがとうございました。

正法眼蔵坐禅箴 自由記

藤田一照
葉山磨博会主宰

このようであるから、昔からずっとみても坐禅を坐禅と知っている者はきわめて少ない。（『正法眼蔵 三昧王三昧』には「…たとひ打坐を仏法と体解すといふとも打坐を打坐としれるいまだあらず…」とある）現在、大宋国にあるもろもろの山で、名の通った大きな寺の住職となっている者であっても、坐禅を知らず、坐禅を学ばない者が多い。明らめ知っている者もないではないが、その数は少ない。もちろん、それぞれの寺では、坐禅をする時間がちゃんと定められている（四時の坐禅 黄昏7PM 後夜3AM 早晨9AM 晡時4PM）。そして、住持をはじめとして僧たちにいたるまでみんながいっしょに坐禅をすることを本来なすべきつとめとしているし、修行者にも坐禅を勧める。しかし、坐禅をほんとうに知っている住持はまれなのである。したがって、昔から近年にいたるまでに、『坐禅銘』を書いた老宿（高僧）は一人二人いるし、『坐禅儀』を撰述した老宿も一人二人、『坐禅箴』を書いた老宿も一人二人いるのだが、どの『坐禅銘』もとりあげるに値しないし、どの『坐禅儀』も坐禅の様子に暗いものが書いたものだといわざるを得ない。たとえば『景德伝燈録』にある『坐禅箴』や『嘉泰普燈録』にある『坐禅銘』といったものがそれにあたる。

そういうものを書いた人たちは、諸方の叢林を行脚し経めぐって一生をすごしたにもかかわらず、一坐の坐禅を正しく功夫（打坐の努力）しなかったのだ。それはまことになげかわしく気の毒なことだというしかない。そしてかれ

らの場合、自己本来の面目に親しむはずの打坐が、そういうものになっていないから、かれらの坐禅の努力はどこまでいっても自己本来の面目に出会うことがない。これもまたかわいそうなことである。そういうことになるのは、坐禅がかれらの身心を嫌って逃げていったからではなく、真実の功夫（修行）をしようと思わず、軽々しく、いい加減な態度で、自分の心理状態に陶醉しているからだ。かれらがそういう書物に書いていることといえば、ただ還源返本（心を外に向かって流転させず内なる本源に返すこと）の様子であり、息慮凝寂の経営（心の働きをやめ精神を静寂・平静にすること）なのである。それはいずれも主観主義化・心理主義化した坐禅の偏向というべきである。そういう坐禅では天台の止観で言われている観禅（法相を観ずる）・練禅（諸穢を除くこと）・薰禅（種子を薰習する）・修禅（自在の境地を修得する）といった修行の階梯にもおよばないし、十地や等覚といった菩薩の最高位の見解にもおよぶところではない。そのようなことでは、どうして仏祖から仏祖へと正しく伝えられてきた坐禅を単伝したといえるだろうか。そのような連中の書いた坐禅についての著述を『景德伝燈録』や『嘉泰普燈録』などに収録したのは宋の編集者たちが誤ってしたことなのだから、これから禅を学ぶ者はそういうものは捨ててしまっ目にすべきではない。

坐禅箴は、大宋国慶元府大白名山天童景德寺宏智正覚和尚の撰述したものだけが、唯一、仏祖であり、真の坐禅箴である。そこで言っていることは正しい。この坐禅箴だけが法界の内外におけるの光明である。古今の仏祖のなかでこの坐禅箴だけが真の仏祖である。これまでの仏もこれからの仏も、この坐禅箴に箴せられていき（いましめられていき）、今の祖も昔の祖も、この坐禅箴によって作仏作祖するのである。これほどまでに素晴らしい坐禅箴は次のようである。

坐禅箴 坐禅を病から治すための正しい坐禅

勅諭宏智禅師 正覚 撰

坐禅はどの仏どの祖にとっても肝心要の契機である。だから仏祖と坐禅を切り離すことはできない。坐禅は仏祖の命脈なのである。坐禅は『普勸坐禅儀』にあるように「万事

休息」の姿勢であるから身においては事（違順のわずらい）に触れることもなく、「諸縁放捨」の営みであるから心において縁に対する（外界のことに知らず知らず心が相手になっている）こともない。坐禅のときは一切の人間の雑務が棚上げにされている（達磨は「外、諸縁を息め 内、心あえぐことなく…」）と言ひ、澤木老師は「打ち方やめ！」と言う）。しかしそれはいわゆる無念無想の死物状態になるということではない。そこでは同時に、「龍が水を得、虎が山に靠（よ）る」と言われるようにどこまでも生き生きと、そして了了として覚め続けていなければならない。つまり「知る」、「照らす」という身心のはたらきは活発におこなわれているのだ。この事に触れることなく知り、縁に対することなく照らすはたらきは、微妙みみょうそのものでわれわれの浅はかな慮知分別ではとらえることができない（非思量）。その知るはたらきが微妙であるのは、そこには是非善悪といった分別の思いがまったく混じりこんでいないからだ。

その照らすはたらきが微妙であるのはそれが迷悟といった兆しを少しもあらわさずにおこなわれるからだ。分別以前、一切の兆しが現れる以前のところで、ただ知り、照らしている。分別の思いのないその知は相手（偶）なしに独立している（奇）。少しの兆しもないその照は向こう側に取りべき相手を持たず了了とただ照らしている。このような坐禅をしているときには、尽地尽界が混じり物がなく、底に徹するほどに澄み清まった無限の海であり、そのなかを魚（打坐仏）が水から離れず水をいのちとして悠々と泳いでいる。果てのない空を鳥が空を離れず空をいのちとしてゆっくりと自由に飛んでいる。

坐禅箴という言葉のなかにある「箴」は病を治療する鍼灸の道具であるが、ここでは坐禅の病を治すために正しい坐禅を行じることを言う。そのような坐禅は仏道の偉大なはたらき（大用）が実現した（現前）ものである。また、声色のような感覚に基づく人間の生活を越えた真実の身の振る舞いかたであり、父母が生まれる前の本来生かされたままのいのちがいろいろに働いている姿である。それは完全なる仏祖の素晴らしい現成である（「仏祖を誇ることなくんば好し」と訓読せずに「莫謗の仏祖」と読み下す）。凡夫の身命をすっかり失って仏祖になっているのだ。だから、頭の長さが三尺で首の長さが二寸であるような人間界

にはありえない姿になっている。

仏々要機

あらゆる諸仏はかならず自己本来成仏を契機として成仏している。その契機の実現こそが坐禅である。

祖祖機要

坐禅は確かに、先師（亡くなった師匠）の教えを受けて行うものであるが、その教えのコピー（複製）であってはならない。自己本来を修行する坐禅が現に行じられているところには、もはや師の教えとそれを忠実に実践している自分というような水臭い関係はない（「先師無此語」は趙州の弟子慧覚の言葉 その文脈では「趙州と柏樹子の公案とが二つ別々にあるのではない」ということ）。ただ純粋に行じられている坐禅があるだけだ。このような祖師と坐禅との同心同体の道理こそが本当の祖祖である。そのような祖祖（＝坐禅）になってこそ（心には）正法が伝わり、（身には）お袈裟が伝わるのだ。一言で言うなら、頭（仏）を回（めぐら）して面（坐禅）に換えるように坐禅が仏になっていること、その坐禅の一つ一つがすべての仏の重要な機関（はたらき 契機）である。面（坐禅）を換えて頭（祖師）を回らす、つまりこれも坐禅のことで、どの祖師どの祖師も坐禅を祖である契機の要としている。

以上で、仏祖と坐禅を別々に見ている人々の誤りを治療する鍼として「仏々要機 祖祖機要」という言葉を打ち出した。

不触事而知

ここでいう知とは普通に言われる「知るもの」と「知られるもの」を二元的に分けた上での「覚知」（知覚・認識作用 知覚でとらえる分別知）ではない。そのような外に対象を想定する覚知は小さなばかりごと（小量）でしかない。また「了了と知る」という了知はつきりでもない。了知ぞうさせんるは造作遷流（造り移り変わる）する生滅の有為法（条件次第で、あったりなかったりする）であるからだ。したがって、ここで言う「知」とは「不触事（自己の外に知る対象（事）を持たないこと）」である。「不触事」とは能所（主客）の分立によってはじめて成り立つ知ではなくそれを成り立たしめるはたらき自体のことであるが、こういう「不触事」こ

そがここで言う「知」なのだ。だからその知を「遍く知る知（遍知＝無上菩提）」だなどと推し量ってはならないし、自分一個の知（自知）だなどと狭い推量ふけをしてもいけない。その不触事ということは『臨濟録』にある普化の言った「明のときは明のみ、暗のときは暗のみで、作為的なことは一切しないで明暗（生死）にうちまかせていく」ということだ。そのときは「母の産んでくれたからだを坐り破って」いるので、自己の正体・父母未生以前の消息があらわれている。



国際ニュース

曹洞宗宗立専門僧堂

カリフォルニア州陽光寺において、3ヶ月（2009年12月15日～2010年3月10日）の安居が開催されました。日本国外で曹洞宗宗立専門僧堂が開設されたのは、今回が3回目です。